

はこの世を去った。

マルゲーニユの精神に則って、アンブロアズ・パレの没後四百年をめざして、日本に大きな影響を残した外科の源流の正しい評価をしたいと考えている。

(慶応義塾大学・医史学研究室)

パレ全集の骨折篇・脱臼篇でみる キリスト教思想

我部 正彦

フランスの十六世紀の大外科医アンブロアズ・パレ（一五一〇～一五九〇）については、「われ包帯し神これを癒し給う」という名言で広く医学史上にも名声をはせているが、高遠な人格と疾病の治癒機転を「自然と神の力」に帰したことで、医療にたずさわる敬虔な姿勢が世界の人々の心を捕らえている。

アンブロアズ・パレについての研究は、⁽¹⁾大村敏郎氏の数々の論文で発表されていて、このパレ全集がフランスで出版されたのは一五七五年で、オランダを通して日本へ入ってきたのが一六七〇年頃である。

今回（昭和五十九年十月二十八日）、約三百年振りにパレ全集（マルゲーニユ版一八四〇―四一刊）の一部ではあるが、骨折篇・脱臼篇を大村敏郎氏の監訳・東京都柔道接骨師会訳

で、直接フランス語から翻訳して刊行した。この意義は真に大きなものがあると思われるのでご報告したい。

このパレ全集の骨折篇・脱臼篇を読むとき彼の医学を支えた底流にキリスト教思想のあることが具体的な事柄によって確認される。ここで聖書全体の目で、パレの臨床における自然治癒力の理解を追ってみると、キリスト教の福音的聖書思想でうまっている。

その第一は、骨折篇の第二十三章「脚部の骨折」におけるパレ自身の骨折についての体験である。これは若い外科医諸君の教育のためにと語っているが、「医科大学の教授をしていた故ネストル氏と私が、国王付きの外科侍医であるユベール氏と三人でパリ近くのボンゾムという村のある患者を往診するように通達された時であった。その時、川を渡ろうとして私の馬を船に乗せるために馬の臀部にむちを入れた。すると馬は興奮して例のひずめの一撃を私にくらわせたのである。この一蹴りで私の左脚は足関節の四横指上で二本とも完全に骨折した。馬が蹴るかもしれないと恐れて私は一歩前に踏み出したが、突然地面に倒れて、骨折した骨が外側にせり出して、肉も靴下も長靴も裂いた。だ

がその時は、男なら耐えられるほどの痛みしか感じなかった。骨は骨折がひどく足が上に曲がったままなので、私は脚を切断しなければならぬのではないかと非常に心配した。私は目と心を天に向けて『神』を仰いだ。それから、慈悲あふれ給う神が私の切なる願いにどうか手を差しのべ給うことを祈った」とある。

この『神』のところに、マルゲーニユは注を付けて、パレ全集一五六四年版には「神の名」となっていると記されていて、これは明らかに「聖書・ヨハネによる福音書」第十四章十三—十四節の言葉へのパレの信仰の態度であると考えられる。

第二は、骨折篇の第九章「肩胛骨々折」の個所である。肩胛骨々折の骨片で、離断した骨片があった場合、「もし肉に突き刺さっていなければ骨片を取り除いてはならない。なぜならば、骨片が再び元にもどって一つに結合するのを何度か見ているからだ」と述べ、「もはや骨膜にくっつきそうもなければ、必然的に引き抜かなければならない。あるいは、別の言い方をすれば、神が時間とともにそれを体外に放出するであろう。なぜなら、そうした骨片

は、残りの部分とはもはやいかなる生命も営んでいないからだ。したがってヒポクラテスが『頭部の損傷』という本で述べているように、生けるものが死せるものを追い出すのである」と解説も加えてある。

第三は、骨折篇の第二十九章「仮骨形成はどのような徴候でわかるか」の項で、自分が脚の骨折をした時の様子を省みた後、「神が人の生命を守ろうとなさる時、往々にして人は手だけが傷を負うような事態に飛び込む。素手で剣をつかみながら、手が傷つく方が他が傷つくよりはまだよいと考えているのだ。脳や心臓は人間の主要器官であり、生命の源であることを知っていたからである。こうしたことは、われわれには不可解な魂の働きというものである」とし、「これは素晴らしい摂理の業である」と神の取り扱いに感謝している。

以上、三個所の抜粋を紹介したが、パレ全集が現代に至るまで四百年間にわたって医学史上で不滅の評価を受けているのは、当時の外科学の水準の高さにも増して、パレ全集にちりばめられた聖書の真理の、普遍的な思想の価値によるものではないかと考えられる。

(1) 参考文献、外科の源流をたずねて「アンブローズ・パレ骨折
扁・脱臼扁」(大村敏郎監訳・東京都柔道接骨師会訳・発刊)

(東京都柔道接骨師会)